

プロテスタントに認められた、聖書を読んだもっとリテラリストな人々は、自然主義の本の読者が、もっと自然主義の読書を発展させるように導いた。自然の中に見えたものを、飾ったり、寓話的あるいは別の意義を付け加えて作り出したりするより、目に見えるものだけをメモし、意味を解釈するのに、足に地の付いた注意深い態度をとるようになった。ハリソンは言う、改革者たちの議論によって、また、プロテスタントの宗教研究を通して行われる文書への現代的なアプローチは、現代科学を生み出す可能性を持つ状況を作り出している、と。この重要な認識は、ステファン・ガウロジャーの、科学が支配的になる前の時代の宗教の役割の形態に関する主要な論文に基づいている。ガウロジャーは言う、神の啓示と自然哲学が合体する、2つの本が1冊の中にまとめられたら、独自の事業を生み出し、それは西洋における自然哲学の独自性の発展に大きな責任を果たすであろう、と。

別の宗教と科学の間に関する理論は、忠誠の告白よりも、特定の理論立場に焦点を当ててようになった。歴史的事実として、理論的立場は時折特定のグループによって組織されることもあるにもかかわらず。まず第一に、これらの立場は科学の歴史学者によって識別される。そして最も多く議論されるのが、何がボランタリズムと呼ばれるものか、ということである。中世の間、神の無限の全能性が定義され守られてきた努力の結果、ボランタリストは神以外のものに関して、神は自由に制約無しに作れると主張した。例えば、前から存在している「善」の観念に従うことなく、また、決定づけられている何が起こるかという点に従わず。プラトンによって、ティマエウスの中で書かれた創造神、すなわち遠大なるデミウルゴスは、世界を混沌から生み出したが、彼ができたことは多くとも無限ではなく、それは世界が、創造神が思い通りにするにはあまりにも反抗的で不安定だったからである。しかし、キリシタンの理論において、神は全能で、要求の通りに創造した。プラトンのように、中世の最高位に権威ある哲学者アリストテレスも、何が物理的に可能で何が不可能かに熱弁をふるう傾向があった。前章で見てきたように、このことはアリストテレスの自然哲学と理論との紛争を巻き起こした。アリストトリアンの主張に対するエティエネ・テンピアの返答、1277年の「**bishop of Paris**」は、ボランタリストの立場であった。にもかかわらず、アリストテレスが物理的に可能だといったことは、例えば、無の空間を作ることも神が求めれば可能だった。

ボランタリストの理論は、新しい哲学者が、彼らの哲学が、無神論とは程遠く、全能な神の観点と手を取り合っているということを示していることを認識した時、再び前面に押し出した。無神論と同様に、この考えの背景にはプラトンやアリストテレスに近い態度が復活しており、神も創造の際に道徳や物理など様々な心理に従わなければならない、それは神にとって作成するものでなく普遍的なものである。このことはよく書物の中で知性主義の立場として言及されるが、一般的に言って、この考えの復活は古代の異教の考えを守るものでなく、プロテスタントの、道徳の点で律法主義的だったり、自然哲学は合理的な説得を欠いてい

るなどという、様々な考えを排斥する傾向にあった。道徳に関連して、ボランティアは神がよいと認めたものはよいという定義を考えたが、知性主義者は、神は良きものだから、神はよいことしか認めないという絶対的な観点をとった。この後半は神の想像力はある種の制約を受けているということを示している。しかし知性主義者にとって、このことは反律主義に好ましく、神がよいと認めればどれほど悪いことであろうとよいのだというように考えられるのである。しかし、ボランティアにとって、知性主義者たちの、我々が最前の手を知ることができると思定する考えは傲慢で、これは神に依るとしていた。さらに、ボランティアの反律主義者は、復活したオーガスティニアンとの観点と密接に関連しており、それは、救いは神の慈悲によってのみ与えられるもので、善行によって得られるものではないのである。

知性主義者の理論は自然哲学の中で、神の存在の難攻不落な合理的証明を与える試みを明確に示した。例えばケンブリッジのプラトン主義者、ヘンリー・モアは、議論を物質と非物質を本質として別のものとして区別するという土台に立って行った。デカルト主義を借りてくれば、状況は完全に受動的かつ不活性で、すなわち、世界の活動は（全ての体の動きをふくめて）行動原理によって引き起こされなければならない、それが非物質の、精神である。非物質的な精神が確実に存在しており（存在しなければ世界に活動はない）それゆえ神がいると主張すること、無神論者に反論するのは簡単なことである。

この考えに関するボランティアの考えの人への問題は、合理主義者の主張の方が、神が今まで一般的にとらえられてきたほど全能でないという含意に比べて弱い印象である、ということだ。（つまり、神が全能でなく聞こえる）長老派の聖職者リチャード・バックスターは、なぜモアが、神がものを活動的にすることができないということを確認できるのかということだ。それに対する皮肉な答えは、モアが、神がものを活動的にすることができないということを認められなかったのである。というのも、そうしたら無神論者の物質主義に反論を唱えるという彼の努力がすべて無駄になってしまうからである。しかしもちろん、モアはこの点について、伝統的なキリスト教とカトリックの二元論をくみ合わせ、また物質は本来的に不活性であり、神でさえも自分の権利でそれを活性化できないということを目指した。

全ての知性主義者が推論のための同じ一連のものを準備したわけではない。しかし、彼らはみなおそらく合理的な決定づけられた原理に行きついている。（モアの物事は完全に不活性であるという原理に類似したもの）そしてそれは神の存在を指摘している。別のリーダー格の知性主義者、G.W.ライプニッツにとって、神の存在は全ての創造の複雑な相互関連性によって保障されている。そして、有名なことだが、彼はアイザック・ニュートンの提案に反論を与えており、ニュートンの考えは、おそらく梓背にの動きは次第に遅くなっていき、いつか未来に世界のシステムが止まってしまうのを防ぐために、神が隕石を送り込んで重力の反動を与え、惑星のスピードを元に戻しなおすだろうというものだ。これはライプニッツにとってまったくずさんに思え、彼はニュートンの神が時折自分の時計を巻き

なおさなければならぬダメな職人のようであるということに反論を与えている。重要なことは、ライプニッツにとって、ニュートンの神は非常に不十分なもので、ニュートンの考えが普及することは宗教を傷つけると思ったことだ。しかし、ニュートンにとって、デカルト主義とライプニッツ主義のシナリオを避けるのは重要だった。一度神が世界を動かし始めたら、もはや神は求められるものではなく、続けていけるものは自然の法則によって物が作動し続けるだけである。神がない状態で世界が回り続ける。これはニュートンたちにとって、まさに無神論の絵図であったのだ。

別の重要なこのライバル性の側面は、これは初期の近代科学の方法論と認識論の構成として見られるからである。知性主義者は、神と永久にともにある絶対的な道德の原理が存在しており、それゆえ、神が作り出せる世界の種類を示し表した合理的な原理が存在する、ということを支持している。ヴォルタイルがライプニッツの立場を皮肉ったことには、神は、自分自身の善良さによって、可能な限りの良い世界を作り出さなければならない。最高の世界は理性で発見可能なので、神の創造の際の考えを哲学者は再構築することが可能であり、理性だけを用いることによって、世界を知ることができるのである。

誤訳あるかも、そしたらごめん。

教えてくれたら修正します。

俺もまだ話の内容理解してないんで、もっとよさそうなのをあげられそうになったら、直してあげなおします。

遅くなってごめんね。

アップロードにてこずっちゃいました。